

(AL 関連の実践) 【中学校/英語】協働学習と発表で英文法の知識を定着させる授業

竹村紗季 (帝塚山学院中学校高等学校)

溝上のコメントは最後にあります

対象授業

授業：中学3年生 英語G (2単位)

教材：中学実力練成 αスタンダード (文理)

実施単元：関係代名詞の目的格、主格と目的格の違い

実施クラス：中学3年B組 (40名)

第1節 授業の目標

英語Gは文法解説と演習を中心とする授業のため、教師→生徒の一方向の授業になりやすい。生徒の英文法に対する苦手意識を減らし、理解度を高めるために、教科書である問題集を使用するだけでなく、PPTやプリントの利用、ペアワークやグループワークを導入している。これらの活動を通して、英文法の定着を図るとともに、「聞く力・考える力・理解する力・自分の言葉にする力」を養うことも目標としている。

第2節 授業の流れ

指導内容	生徒の活動	留意点	時間
・英単語小テスト	・解答	・定期試験と同じ環境にする	3分
・パワーポイントを利用し ①目的格 (whom と which) の説明をする ②既習事項の主格との違いを確認する	・ポイントを理解する ・例文を声に出して読む	・聞くことに集中させる (プリント配布はあとで)	10分
・パワーポイントのスライド資料を配布し、 上記①②の理解を深める。	・重要な箇所にマークする ・説明を聞いて大切だと思っ た内容をメモする	・重要な箇所に気付かせる ・自分の言葉でまとめさせる	5分
・練習問題 (主格と目的格が混在した6題) ・解答、解説	・解答する ・相互採点する	・① <u>関係代名詞以降の文に注目させる</u>	7分
・グループワーク (5人1グループ) 本時の学習内容をまなボードにまとめる	・各グループで相談し、 まとめる	・② <u>グループワークの目標を明確にする</u>	15分
・発表	・発表する ・聞く態度をとる	・発表中は発表者に注目させる	5分

・まとめ	・発表内容を振り返る	・次の授業につなげられるよう、発表内容をまとめる	5分
------	------------	--------------------------	----

※ 破線①…関係代名詞以降の文に注目はさせるが、詳しい説明はしない(生徒に気づかせるため)

※ 破線②…本時のグループワークの目標

「隣のクラスに、みんなが関係代名詞の主格と目的格の違いを教えに行くので、自分たちの言葉でまとめよう！」

第3節 授業で大切にしていること

(1) 生徒の活動にメリハリをつける

①新出の文法解説をするときは、筆記用具を置いて、説明とパワーポイントに集中させる。(聞く力)

本時は関係代名詞の目的格を扱ったが、生徒のよりよい理解の助けとなるよう、イラストやセリフ、図を用いたパワーポイントを使い、関係代名詞を用いて2つの文を1つにするポイントを確認する。

②1つの例文の説明が終わったら、PPTのスライドを印刷したプリントを配布し、大切だと思ったところにマーカーを引いたり、自分の言葉で説明を付け加えたりするよう指示する。(考える力、自分の言葉にする力)

生徒がプリントに記入している間は机間巡視をし、フォローをする。

③問題演習をする(考える力、理解する力)



図1 授業風景

<p>私には奈良に住んでいる友達がいるよ。 I have a friend lives in Nara. I have a friend who lives in Nara.</p> <p>あちらは私が昨日会った男の人です。 That is the man I met yesterday. That is the man whom I met yesterday.</p>	<p>あちらは私が昨日会った男の人です。 That is the man. I met him yesterday.</p> <p>That is the man I met yesterday. That is the man whom I met yesterday.</p> <p><i>重要なところを見つけよう!</i></p>
---	---

図2 PPTの内容例

※「今、何をやる時間なのか」を明確にすることで、集中力を高められると考える。また、この

「説明を聞く→プリントに自分なりに大切なことを書き込む→問題演習をする」という流れを常に行うことで、今行っている活動が次の学習活動につながっていくことを意識させることができると考える。

(2) グループワークの目標を伝える

授業の後半で、既習事項の関係代名詞の主格と、本時で学習した目的格の違いをグループでまとめることにした。グループワークをした後、生徒の中に「何かよく分からなかったけど、わいわいできて楽しかった～」という、生徒にとっては一見プラスのように感じるができるが、教師が目指すものに達していない感想がうかがえる場面もあるため、ワークを行う前に必ず目標を伝えるように心掛けている。本時のグループワークは、主格と目的格の違いをしっかりと理解できているかを確認することを目的としていたため、生徒には「今から、今日学習したことを隣のクラスに説明しに行くことになりました。自分たちの言葉で相手に伝わるように、各グループでまなボードにまとめましょう。内容がしっかりと理解できていれば、隣のクラスのみんなに主格と目的格の違いを説明できるよ。」と伝えた。

授業の前半の説明で用いた PPT のプリントには、自分の言葉で付け加えた説明がある。

主格 I have a friend lives in Nara.
I have a friend **who** lives in Nara.

目的格 This is the man I met yesterday.
This is the man **whom** I met yesterday.

(生徒の例) 「穴の開いている場所が違う」

「文の頭が空いていれば who、文の真ん中が空いていれば whom」

「うしろに主語がなければ who、うしろに主語と動詞があれば whom」

これらの書き込んだ説明を見せ合いながら、グループで言葉を選んでまなボードに書き込む姿が見られた。(個の学習→グループの学習)

(考える力、理解する力)



図3 グループワークの様子

(3) 発表時の姿勢を守る

発表をする前に、次のことをクラス全体に確認する。

- ① 発表者はクラス全体に伝わるよう、大きな声で話す。
- ② 聞く側は、発表者をしっかり見る。
- ③ 発表が終わったら大きな拍手をする。

これらを行うことで発表内容をしっかり聞くことができるだけでなく、発表時のクラスの雰囲気もより良くなる。特に③の拍手は、相手に「発表してくれてありがとう」という気持ちを伝えられるものであるため、発表をすることは恥ずかしいことでも嫌なことでもないという意識を芽生えさせることができると考える。(自分の言葉にする力、聞く力)

第4節 発表の様子

今回の発表では、「関係代名詞の後ろに主語がなければ主格、後ろに主語+動詞があれば目的格となる」とまとめたグループ、関係代名詞で1文にする前の2文に注目し、「I have a friend. / She lives in Nara. の a friend と she のように、同じ内容を表すものが隣に並べば主格がくるのではないか」と発表するグループ、「関係代名詞の後ろの文に必ず穴が開いている。その穴が関係代名詞のすぐ後ろにあれば主格、離れていれば目的格となる」と発表するグループがあった。



図4 発表の様子

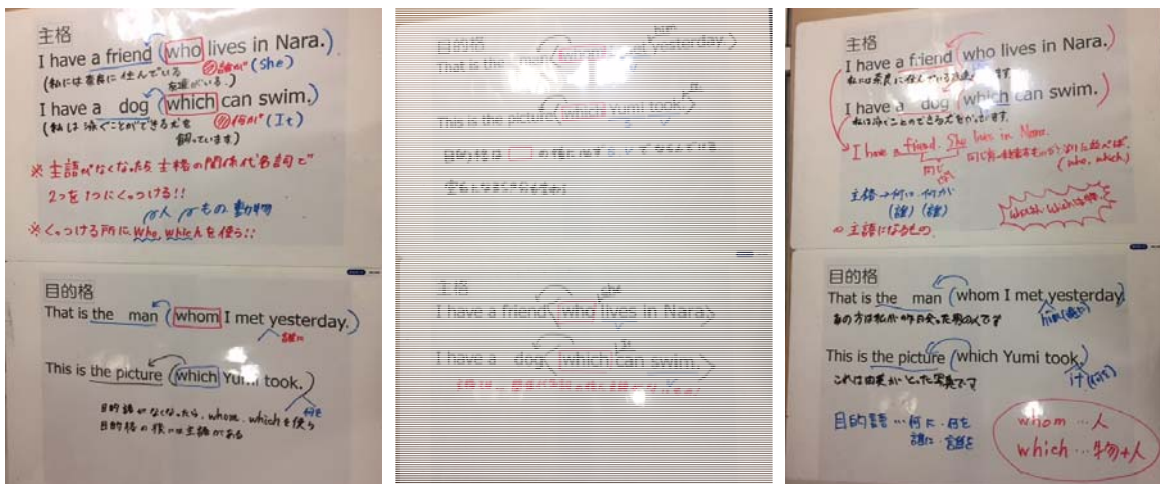


図5 成果物の一例

第5節 課題

- ・時間的に全グループの発表が難しかったため、代表で3グループのみの発表とした。今後は授業のコマ数と全体の流れを工夫しながら、全グループが発表をできるようにしていきたい。
- ・発表を通して理解を深められた点を、さらに書き込めるスペースをプリントに設けるべきであった。今回は、各グループがまとめた内容を、次の授業時冒頭で再確認し、それらを踏まえて復習問題に取り組む形となった。
- ・個の学習とグループの学習のそれぞれに、「聞く力・考える力・理解する力・自分の言葉にする力」の項目を入れ、生徒が主体となって「分かった!」と感じられる部分を増やしていきたいと考える。

溝上コメント

- ・英文法の学習はとかく一歩通行的な講義形式の授業となりやすいが、この授業ではアクティブラーニングの特徴である「外化」のポイント（演習課題を説明する環境としての“他者”という装置、ペアワーク、前に出てきて発表）を採り入れることで、英文法の定着を図るだけでなく、表現力、傾聴力、思考力をも育てようとする学習目標が多次元にわたる内容豊かな授業となっている。
- ・「習得」（基礎知識）の学習プロセスのなかでアクティブラーニングを採り入れている点がすばらしい。世の中にはまだまだ、習得をしっかりした上でないとアクティブラーニングはできない、と述べる教員が少なからずいる。インプット（聴く）すれば、アウトプット（アクティブラーニング）もするというのは、学習論の基本である。
- ・全国の授業でさまざまな「前に出てきて発表」を見ているが、そのなかには、書いたメモを見るのに下を向いて発表する生徒や、まなボードが黒板に貼れるので、黒板を見ながら他の生徒にお尻を見せて発表するという状況が少なからず見られる。この授業では、図4にあるように、他の生徒にまなボードに書いたものを見せながら、他の生徒のほうを向いて発表するという指導がなされている。聞き手の傾聴力も指導されている。発表者の発表のしかただけを指導するのではなく、聞き手の傾聴力も指導していければ、発表者の発表のしかたも良い意味での緊張感をもって変わってくるし、発表の出番がない他の生徒の学びも深くなる。YouTubeで示される桐蔭学園のアクティブラーニング型授業の改革においても、発表のしかたと傾聴力について指導が入っていることが説明されている。

【参考ページ】

- ✓ （講話）外化なしの学習は思考力育成を放棄しているに等しいー外化としてのアクティブラーニングの意義
- ✓ （桐蔭学園）前に出てきて発表
- ✓ （AL 関連の実践）【中学高校】筒井規子・道中博司（帝塚山学院中学校高等学校・教育研究プロジェクト）「帝塚山学院中学校高等学校ーアクティブラーニング型授業を洗練させる取り組みー」

プロフィール



- ・ **竹村紗季 (たけむら さき) @帝塚山学院中学校高等学校・英語**
- ・ 一言：多角的な指導方法を取り入れることで、英文法の定着と4つの力（「聞く力・考える力・理解する力・自分の言葉にする力」）を養っていきたいと思います。個の学習だけでなくグループ学習においても、生徒が主体となって「分かった！」と感じられる授業を目指しています。